

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 6 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2020

課題番号：15K02345

研究課題名(和文) モダンの黎明 1920-30年代の移郷者たちと「危機の20年」の文化史

研究課題名(英文) At the Dawn of Modernity: the "Twenty Year's Crisis" and the Cultural History of the 1920s and 1930s

研究代表者

吉田 朋正 (YOSHIDA, Tomonao)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：40305404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：「狂騒の20年代」とも呼ばれる戦後アメリカの好況期と、ウォール街株価大暴落に始まる大恐慌の1930年代。別々に捉えられがちなこの二つのdecadesを、むしろ二つの大戦に挟まれた一つのエポックとして読み解き、英米を中心とする新たな国際秩序が形成されたこの「危機の20年」(E. H. Carr)に育まれた密かな文化史的水脈を探る。とりわけ、この期間に国外脱出を果たした作家や芸術家たちの動向と、彼らの移郷を促した政治・経済的な諸条件が本研究の考察の対象である。モダニズムという文化現象を特定の国家内で見るのではなく、欧州と米国の「あいだ」で繰り広げられた動的運動として捉えることが主眼となるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の対象となる1920-30年代は、ヨーロッパ中心の19世紀的世界が次第に消失し、「アメリカの世紀」とも呼ばれる20世紀がいよいよ確固たる形で出現した時期に当たる。好況期から大恐慌へと暗転して行くその20年間のプロセスは、バブル経済から構造不況に至る変化を実体験した私たちにとっても格別な現実性を帯びており、ある意味、そこにはいま私たちが生きる世界そのものの原風景があると言ってよい。こうした時代の文化とその背後にある社会的構造や集団的趨勢を検証することは、当時の文学・芸術についての知見を広げるのみならず、必ずや現在のポスト資本主義社会が抱える文化の諸問題をも明らかにするであろう。

研究成果の概要(英文)：The boom years of postwar America, commonly referred to as the Roaring Twenties, and the Great Depression years of the 1930s, are generally considered to be two quite different, even contrasting decades. In this study, however, I try to read them as a single epoch sandwiched between two world wars, and explore the secret cultural-historical context that was nurtured during the period of the "Twenty Years' Crisis" (E. H. Carr), when a new international order centered on Britain and the United States was being formed. In particular, I will focus on the movements of American exiles who fled the country during the Twenties and later became the driving force of Modernism, as well as the political and economic conditions that encouraged their expatriation. Rather than looking at the cultural phenomenon of modernism in the context of a specific nation or region, my main objective is to see it as a transatlantic and dynamic movement that unfolded "between" two continents, America and Europe.

研究分野：批評史

キーワード：モダニズム ダダイズム メディアと芸術 1920年代 1930年代 第一次世界大戦 ロスト・ジェネレーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2012-2014年度の3年間に渡って科研費(基盤C)の支援の下で実施された、1920-30年代のアメリカ、特にニューヨークを中心に活躍した一部の作家やインテリ層の趨勢に関する研究を、より広い展望に立って発展的に継承しようとしたものである。

先の研究は、リベラル系の雑誌として広く知られた *The New Republic* 誌の周辺で活躍した著述家たち 特に Malcolm Cowley, Kenneth Burke, Edmund Wilson の3人 を中心に、いわゆる「ロスト・ジェネレーション」に属するアメリカの知識層の動向を探るものであった。彼らの多くは“gentlemen volunteers”と呼ばれる学生兵士として第一次世界大戦に従軍し、戦後は国外脱出者としてダダをはじめとする欧州の文学・芸術運動に参加、帰国後も多方面で活躍し、アメリカの文学・芸術史上もっとも実り豊かな世代を形成したことで知られている。

そこでまず研究の起点となったのが、「狂騒の1920年代」を活写した現代的古典として名高い Malcolm Cowley の自伝的クオニクル、*Exile's Return* (1934)であった。本研究代表者は、同書、およびその続編とも言うべき1930年代録 *The Dream of the Golden Mountains* (1979) の翻訳に携わったことを直接のきっかけとして、著者 Cowley 自身を含む、アメリカから欧州へと渡った当時の「移郷者」(exileの訳語とする)の動向を精査することとなった。

その過程で明らかになったのが、彼らの「旅」が、文学や芸術に関する間国家的な理想によるのみならず、当時の極めて特殊な経済状況によっても引き起こされていたという事実である。未だ金本位制の体制下にあり、金貨や兌換紙幣も流通していた1920年代初頭の経済体制下では、現在のような金融政策、つまり通貨の流通量のコントロールはきわめて限定的であり、極端なインフレもデフレも一種人の手の及ばない「天災」である他なかった。結果、通貨の内在的価値は、物価と連動する形で為替レート自体は固定されていたがゆえに かつてない振幅で上下することになり、欧州ではこれに寄生する 為替ブタ *Valutaschweine* と蔑称される投機的な存在までが生じるに至った。彼らは、この劇的な価格変動(valuta)に乗じて、為替両替と商品転売を延々と繰り返しながらヨーロッパを旅し続ける寄生者(schweine)の群であった。そしてイグザイルとして欧州を訪れていた若いアメリカの芸術家たち自身もまた、多かれ少なかれ、こうした寄生的デラシネに属していたのである。モダニズム運動の背景にある、このトランスアトランティックで特殊な政治・経済的環境の発見こそが、本研究の出発点となった。

2. 研究の目的

一般にアメリカ文学史の文脈で読まれることの多い、上記の Cowley による1920年代録は、実はこの「ヴァリュータシュバイン」で溢れかえったインスブルック駅の光景から渡欧以降の物語をひもといっている。戦後欧州へと向かった多くのアメリカ出身の移郷者たちは、経済的行為子としてみれば、まさにこうした価値騰落にたかる寄生的存在にほかならなかった。彼らは、むしろ格別金銭的に恵まれていたわけではない。だが、上記のような欧州の特殊な経済環境下において、彼らはやがて基軸通貨となるべき米ドルを手にした新興富裕国からの渡航者であり、彼らがどれほど母国の「拝金主義」を呪詛しようとも、彼らの享受した特殊な自由が、突如として世界最大の債権国となった母国アメリカを後ろ盾としたものであることは間違いなかった。また彼らが出発時にトラベラーズ・チェックとして携えた「ドル建て」の渡航費用の多くさえ、実のところアメリカン・アンビュランス・サービスやグッゲンハイムのような基金が、学生帰還兵であった彼らに気前よく授けたものだったのである。

いわゆる「ロスト・ジェネレーション」の作り出した自由奔放な新時代の文学と芸術は、ある意味では、こうした経済的環境によってはじめて生み出されたものであった。従軍者であった彼らは、ヴェルサイユ体制に乗じた母国アメリカの経済的地歩を「禁酒法」以上の偽善として嫌悪し、これを国外脱出の理由としたとも伝えられる。だが、それは事実の半面を語ったものに過ぎない。ダダ運動への関与を始め、体制に対する一種文化的な「叛乱」という形で始まった彼らのモダニズム運動は、他方ではどこまでもアメリカ型資本主義のグローバルな台頭と、それによって引き起こされた上記のごとき欧州の経済的混乱という文脈下で、はじめて息吹を与えられたものであった。これは、アメリカから欧州に渡った多くのモダニストたちが密かに抱えたジレンマであり、Cowley の自伝的年代記 *Exile's Return* は、これが彼らにとって、しばしば痛烈に意識せざるを得ない自己撞着であったことを鮮やかに描き出している点で、きわめて興味深い。

本研究は、モダニズム運動を以上のような大きな社会的コンテクストの中で、とりわけ、国際社会におけるアメリカ合衆国の台頭というグローバルな政治・経済的構造の再構築の過程の中で、捉え直すことを主目的の一つとする。もう一つの、しかしむしろ本研究期間後により発展的に継続されるべき目標は、一般に19世紀末に生じたとされる「消費社会」という新たなパラダイムのなかで、象徴主義からモダニズムに至る現代的な文学・芸術運動が体現し得たものは一体何かであったのかという芸術史的な問いを自ら打ち立て、これに一定の解答を与えることである。

本研究において重要な研究対象の一つとなるはずの、Edmund Wilson による1931年刊行のモダニズム文学論、*Axel's Castle* は、19世紀末サンボリスムを高度に芸術至上主義的なものとして理想化し、20世紀初頭のいわゆるハイモダニズムの前哨を成すものとして捉えている。他方で Cowley, *Exile's Return* (1934初版, 51年改訂版) は、Wilson の著書とほぼ同時期に

書かれたものでありながら、このような文学ないし芸術という枠内だけでのサンボリズム解釈に抗い、芸術的モダニティーないしモデルニテの発生を、むしろ社会的観点においてこそ重要な意味を持つと解釈するものであった。例えば 18 世紀ロンドンのクラブ・ストリートは、なるほどモンマントルやヴィレージのように「貧しい」芸術家たちの集う場所ではあったが、決して今日の意味における「アーティスト」のコミュニティだったわけでない、と Cowley は言う。それはミュルジュールの『ボヘミア生活誌』のようなテクストによって 19 世紀に初めて生み出され、消費的な文化記号のひとつとなったのであり、サンボリストたちの芸術至上主義的態度やその脱社会的な主張とは裏腹に、結果的、彼らは資本主義社会に初めて作り出された発明品のひとつなのだと Cowley は言う。自分たちのパリでの行状もまたそうしたエフェクトの一つに過ぎないと断言するその視点は、「ロスト・ジェネレーション」が自ら語った自己反省的明察として、今もなお注目に値する。

本研究計画では、前回の、どちらかと言えば狭いサークル内の知性史という性格が強かった研究成果を大いに引き継ぎながらも、上記のようなより大きな歴史的コンテクストを構築することが第一の課題となる。モダニストたちの同時代における軌跡を辿ることに加えて、彼らがみずから行った、象徴主義以降の文学的・芸術的モデルニテへの自省的な問い掛け 上の Cowley のそれに代表されるような をもまた現代的文脈の中で再検討し、これを包括的展望のなかで読み直すことこそが重要な研究の起点となるだろう。

3. 研究の方法

本研究の対象となる 1920-30 年代は、ヨーロッパ中心の 19 世紀的な世界 ホブズボームのいわゆる「長い 19 世紀」 が次第に消失し、「アメリカの世紀」とも呼ばれる政治経済的パラダイムがいよいよ確固たる形で出現した時期にあたっている。特に好況期から大恐慌へと暗転して行く第一次世界大戦後の 20 年間は、バブル経済から構造不況へと至る変化を実体験した現代の私たちにとっても格別の現実性を帯びており、ある意味、そこには私たちの生きる現代社会そのものの原風景が広がっていると言っても良い。

このような時代の文化と、それを形成したより大きな社会構造や集団的趨勢を検証することは、したがってかなりの程度まで、現在の資本主義社会が抱える文化の諸問題を考察することにも繋がるに違いない。そのような期待の下、本研究では 1920-30 年代のアメリカの知的移郷者の動向を、先述のような政治・経済史的観点から再度トレースするとともに、その現代的エフェクトにまで調査の目を向けることになる。

歴史的に長い眺望を持つこうした検証においては、例えば第一次世界大戦後、すぐに作家や芸術家たちに支援の手をさしのべ、後の知的コミュニティの形成にも大きく寄与した一部巨大資本の役割が典型的な調査対象の一つとなるだろう。アメリカに拠点を持つグッゲンハイム基金はもちろん、個人として多くの芸術家たちのパトロンであった一族の一人、ペギー・グッゲンハイムは、その著書 *Out of This Century: Confessions of an Art Addict* (1972) とともに、モダニズムの貴重な証言者として欠くべからざる存在である。また「モスクワ裁判」以降、アメリカ国内では一時筆を折らざるを得なかった Malcolm Cowley 本研究においてメインとなる人物の一人 に手を差し伸べたメロン財団やその出版事業「ボーリングン」など、この領域において調査すべき対象はきわめて多い。また前回の研究と同じく、今回も Cowley, Burke, Wilson らの 1930 年代における拠点であった雑誌 *The New Republic* は重要な調査対象となる予定であるが、併せて当時チェルシーにあった NR 誌編集部に程近い「亡命者の大学」、*New School* もまた、Cowley の著書 *The Dream of Golden Mountain* (1979) におけるいくつかの記述を通じて、本研究の視野へと入ってくることになる。

以上のような歴史記述上の対象を持つ一方で、本研究はまた、前項目でもすでに示唆したように、より抽象的な文学的ないし芸術的モダニティー〔モデルニテ〕の概念に関する理論的省察という面も有する。先述の Wilson 著書が典型的にそうであったように、モダニストたちは、しばしばサンボリストの芸術至上主義的態度をみずからのモデルとし、作品の創出を高度に理念的な あるいは脱社会的な プロセスとして捉えた。だが他方で、例えばボードレールの「モデルニテ」の主張が典型的にそうであったように、サンボリストは時には永続的な美ならぬ一過的スタイルの横溢こそを讃え、あるいはまた、ヴァレリーの反美学にあからさまな形で見られるように、ア・プリオリな真理の住処としての作品（ハイデガーの言うような）ではなく、ア・ポストプリオリな〔交換〕価値 = 意味の生成の場としての作品概念の提唱者でもあった。こうしたラディカルな態度はいずれも、芸術作品を審美的なものとして以上に価値転換的な 設え として捉え、文化内に戦略的に導入されるものと解しようとする態度と言える。

モダニズム運動の含意するこうした文化理論的な側面については、研究代表者が現在本研究と並行する形で行っている、一般にメディア論者として知られた Marshall McLuhan のいくつかのテクストを手がかりとした、現代的テクノロジーと芸術の本源的関係をめぐる考察と強く連結されたものになるだろう。これらについては、一般誌掲載の論文ないしエッセイという形で、継続的に発表して行く予定である。

4. 研究成果

本研究課題の主要な成果として、単著 1 冊、論文 5 点（内 2 点は単著収録）を発表した。また招聘による学会発表を 1 回行った。

- 〔単著〕吉田朋正『エピソードカルな構造 小説 的マニエリスムとヒューモアの概念』彩流社、2018 年、324 頁。
〔論文〕吉田朋正「ナルシスのプロテゼ 『メディア論』再訪 (1)」、『思想』2018 年 2 月号、岩波書店、61-81 頁。
〔論文〕吉田朋正「書物シャーマニズム 『メディア論』再訪 (2)」、『思想』2020 年 6 月号、岩波書店、157-178 頁。
〔論文〕吉田朋正「ニューヨーク黎明 (1) 『ニュー・リパブリック』と三人の批評家」、*Metropolitan*、第 11 期第 2 号、2016 年 4 月発行、メトロポリタン編集局、472-488 頁。
〔論文〕その他、 に収録された論文 2 点は省略。
〔研究発表〕「Value, Valuta, Valutaschweine 資本主義と モダン の黎明」日本アメリカ文学会東京支部 5 月例会、2019 年 5 月 18 日、慶應義塾大学三田キャンパス。

また本研究課題と関連性の高い周辺の成果として、編著書 1 冊、図書掲載論文 2 点、（左編著書に収録）書評論文 2 点を発表した。

- 〔論文〕吉田朋正「なぜすべての詩は本質的にコピュラなのか」下記 『照応と総合』所載、993-1006 頁。
〔論文〕吉田朋正「ロゴスからミュトスへ 土岐恒二と類比の星座」同書、1007-1026 頁。
〔編著書〕土岐恒二著・吉田朋正編著『照応と総合 土岐恒二個人著作集 + シンポジウム』小鳥遊書房、1050 頁。
〔書評論文〕吉田朋正「タイポグラフィカル・イマジネーションの世紀（荒木正純『『荒地』の時代 アメリカの同時代紙からみる』〔小鳥遊書房、2019 年 2 月〕書評、『週刊読書人』2019 年 9 月 13 日号）
〔書評論文〕吉田朋正「書評：岡室美奈子・川島健編『ベケットを見る八つの方法 批評のボーダレス』水声社、2013 年、385pp」、『英文学研究』2015 年、第 92 巻、日本英文学会、128-131 頁。

加えて、上記成果と比べいづれも本研究課題との関係は間接的であるが、同じ 20 世紀におけるインテレクチュアル・ヒストリーという点で同レベルの学術的意義を持つと思われる成果として、以下の翻訳 3 点（内、1 点に関する訳者解説を含む）を発表した。

- ダンカン・フォーズ「思想史という営みの感性的側面について」、『思想』2017 年 5 月号〔特集：政治思想史における近代〕、岩波書店、10-30 頁。〔同論文に関する訳者解説を含む〕
ジョン・ダン「政治理論の歴史」、『思想』同号、76-108 頁。
J・G・A・ポーコック「クエンティン・スキナー 政治学の歴史と歴史の政治学」、『思想』同号、181-205 頁。

上記の主要な成果の中でも、本研究課題にとってもっとも重要な意義を持つものは、 の単著である。特に 100 頁以上に渡る最終章を占めた考察、「モダンの二重螺旋〔ルビ：よりいと〕

E・ウィルソン、M・カウリー、K・パークの一九三〇年代」は、New Republic 誌を中心に活躍していた同時代を代表する 3 人の批評家を通して、20-30 年代の大変換期における知的状況を活写したもので、同様のテーマは の論文においても、また の研究発表においてもいっそう発展的に展開されている。

また、前項目 3「研究の方法」末尾で述べた、芸術史におけるモダニティーをめぐるより理論的で非歴史的な考察については、単著 の第一部「批評のハードウェア」を成す論文 3 点において、また、後に発表された 、 、 の論文において、いっそう発展的な形で展開されている。

以上 2 つの大きな研究の方向性は、今後も相互補完的な形で追求されてゆく予定である。なお、 のより歴史的なテーマについては、『ニューヨーク黎明』と仮題された 1920-30 年代論に、また の理論的なテーマについては、『ナルシスのプロテゼ』と仮題された、芸術的モダニティーと技術やメディアの関係を幅広く扱った単著として、それぞれ一冊にまとめられる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田朋正	4. 巻 3306
2. 論文標題 タイポグラフィカル・イマジネーションの世紀（荒木正純『『荒地』の時代 アメリカの同時代紙からみる』〔小鳥遊書房, 2019年2月〕）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田朋正	4. 巻 1154
2. 論文標題 書物シャーマニズム 『メディア論』再訪 (2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 157-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田朋正	4. 巻 1126
2. 論文標題 ナルシスのプロテーゼ 『メディア論』再訪 (1)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思想（岩波書店）	6. 最初と最後の頁 61-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ポーコック, ジョン; 吉田朋正 (翻訳)	4. 巻 1117
2. 論文標題 クエンティン・スキナー: 政治学の歴史と歴史の政治学	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 思想（岩波書店）	6. 最初と最後の頁 181-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ダン, ジョン; 吉田朋正 (翻訳)	4. 巻 1117
2. 論文標題 政治理論の歴史	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 思想 (岩波書店)	6. 最初と最後の頁 76-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 フォース, ダンカン; 吉田朋正 (翻訳)	4. 巻 1117
2. 論文標題 思想史という営みの感性的側面について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 思想 (岩波書店)	6. 最初と最後の頁 10-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田朋正	4. 巻 58
2. 論文標題 ヒューモア の概念 小説 とエピソードカルな構造	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Metropolitan	6. 最初と最後の頁 489-530
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田朋正	4. 巻 58
2. 論文標題 ニューヨーク黎明 (1) 『ニュー・リパブリック』と三人の批評家	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Metropolitan	6. 最初と最後の頁 472-488
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田朋正	4. 巻 58
2. 論文標題 照応と総合 土岐恒二の仕事 への一視点	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Metropolitan	6. 最初と最後の頁 409-419
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田朋正	4. 巻 92
2. 論文標題 〔書評〕岡室美奈子・川島健編『ベケットを見る八つの方法 批評のボーダレス』	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 英文學研究	6. 最初と最後の頁 126-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 吉田朋正
2. 発表標題 Value, Valuta, Valutaschweine 資本主義と モダン の黎明
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部(2019年5月18日)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吉田 朋正	4. 発行年 2018年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 328
3. 書名 エピソード的な構造: 小説 的マニエリスムとヒューモアの概念	

1. 著者名 土岐 恒二、吉田 朋正	4. 発行年 2020年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 1050
3. 書名 照応と総合：土岐恒二個人著作集 + シンポジウム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------